

松川だるまの民族誌

藤 智仁

1. はじめに

「松川だるま」とは、和紙を型抜きして絵を描いた張子玩具の一種で、江戸時代末期から仙台で作られ続けてきただるまである。天保年間（1830~1844）に伊達藩の藩士・松川豊之進が創始し、それ以来下級武士の収入を補うための内職として作られてきたという。最多時には10軒以上を数えた業者であるが、現在では松川だるまを製作しているのは、仙台市内に3軒のみとなっている。その中でも同市柏木にある「本郷だるま屋」が松川だるまを継承している。

そもそも松川だるまは毎年の縁起物であり、人々は正月が来るたびに松川だるまを買い求め、前年のだるまを各地のどんと祭で燃すのが通例であった。新しいだるまは神棚に祀られ、1年間の無病息災や五穀豊穡が祈願される。しかし、そのようにして信仰とともにあったはずの松川だるまもある時から観賞用の郷土玩具として、言いかえると伝統的工芸品として人々に捉えられるようになった。物の持つ意味が時代とともに変化したのである。

本論文では、まず松川だるまの歴史やその作り方を記述する。また本郷だるま屋について、その職人たちや1年間のスケジュール、さらには顧客などについて言及し、本郷だるま屋のモノグラフを作することを目的とする。そして松川だるまが昔と現在で人々にどのように認識されているかを明らかにする。

2. 松川だるまの歴史

私がフィールドワークを行った本郷家によると、松川だるまを創始したのは仙台藩士松川豊之進であると伝えられている。だるまに冠されている松川という名もその創始者に由来する。天保年間（1830~1844）に始まっただるま作りは、その後下級武士の収入を補うための内職として作られてきたという。松川だるまは正月の縁起物として仙台庶民の信仰を集め、神棚に祀られてきた。

縁起だるまの風習がいつ仙台に伝わり、松川豊之進がどのように松川だるま作りを始めたのか、その辺りの事実は残念ながら文書に残されておらず、ただ本郷家に伝わる伝承から推測する他ない。ただし、松川豊之進という人物の存在は分かっている。鈴木（1972:182-183）によると、豊之進は仙台藩の参政書記だった。明治維新によって新政府から世良修蔵参謀という人物が仙台藩に送られてきたのだが、豊之進は旧幕府派の藩士たちとともに世良参謀を暗殺したのだ。1868年のことである。その

後新政府により、世良参謀を暗殺した一味に対して捕縛命令が下されたが、豊之進は捕まらなかった。行方不明のままになってしまったが、これは城下町北六番丁で土人形（赤物）を作る家で豊之進を匿ったためだという（藤原 1981:219）。後に述べるように、松川だるま業者の大半は他の仕事との兼業であった。その中には土人形を作るかたわら、だるまの売れる冬季に松川だるまを作っていた業者もいた。豊之進はだるま製作者としてこの家と親交があったのだろうか。

また、松川だるまには「開眼」という概念は伝わらなかった。松川だるまは最初から両目とも瞳を入れて売っている。これは初代仙台藩主の伊達政宗が独眼であったため、それに配慮してのことと伝わっている。

幕末に下級武士の内職として作られていた松川だるまであるが、当時何人くらいの作り手がいて、どのように作っていたか、またいくつ生産していたかなど、具体的なことは分からない。しかし本郷けさの氏によると、時代は下って大正期には 20 軒あまりの業者があったと聞いているそうだ。また関（1966:1）によれば、大正期までは 10 軒あまりの業者があったという。いずれにせよ縁起だるまの需要期は 12 月から 3 月までの短い期間であり、だるま作りを専業とするのは難しく、大半の業者は副業として営んでいたのである。その本業は、瓦屋根葺き、陶器製作、人形製作、堤焼き製作などであった。その後、昭和に入り、仙台空襲や後継者不足などから松川だるま業者も徐々に廃業していき、現在では仙台市柏木に 1 軒、同堤町に 2 軒、合計 3 軒を残すのみとなっている。

松川だるまは他の地域のだるまに見ない、豪華絢爛の装飾を持つことで知られているが、その技術に改良を加えた人物がいたようだ。その名は高橋徳太郎、通称面徳で、天保元年（1830 年）に江戸で生まれた。仏師であった徳太郎は、父の死後仙台に移り住み、御神楽面や能面を刻んだ。明治年代に入り徳太郎は副業としてだるま製作を始めたが、仏師としての器用さを発揮して従来の松川だるまに描彩等の改良を加え、現在のような松川だるまになった（関:1966）。

3. 松川だるまの制作工程

本郷だるま屋では、松川だるまは、“宝船”、“玉入り”、“並”の 3 種類を作っている。

だるまの胴体に宝船を貼り付け、あたかもだるまが船に乗っているかのような格好をしているのが“宝船”で、4 号（4 寸）から 30 号（3 尺）までである。7 号（7 寸）あたりからはだるまの胴体右に大黒、左に恵比寿の張子がつく。

だるまの正面に、宝船ではなくて大黒や恵比寿の張子を浮き出すようにつけているのが“玉入り”である。また“並”にはだるま正面にろうそく立ての模様が描かれている。目も粘土ではなく、筆で直接だるまの上に描かれたものとなる。

ここでは最も彩飾の豪華な“宝船”の作り方を簡潔に述べる。

①だるまの木型に食用油を塗り、だるま紙と呼ばれる和紙をはる。

- ②^{つゝまた}角又という、海藻で作るのりを火にかけて溶かし、和紙の上にまんべんなく塗りこみ、木型に合わせてだるまの形を作る。さらに手の平に乗るくらい棒で強くこすりつけることでだるまの形全体のゆがみを直す。この作業を“いしぶがけ”という。
- ③和紙をはり終わっただるまを直射日光で干す。乾燥期間は大きさや天候により異なるが、小さいだるままで3日、大きいだるままでだいたい7~10日かかる。雨や雪が降ってきた場合すぐさま室内に取り込まねばならず、その出来は天候に大いに左右される。和紙をはって乾かすこの①~③までの工程を“はりかた”という。
- ④乾燥し終わった和紙を木型からはがす。小刀でだるまの背中を縦に切り、竹べらを切り目からさしこみながら和紙を木型からはがす。はずし終わっただるまの背中の切り口は、和紙と角又ではって補修する。この作業を“めばり”という。
- ⑤だるまの目の部分を小刀で切り取り、底からだるまの内側に手を入れ、内側から粘土で作った目玉をとりつける。戦前にガラス製の目玉を用いたこともある。
- ⑥だるまの底に、“起き上がり”と呼ばれる粘土の台をつける。その際、細長い和紙と角又で、幾重にも接着する。起き上がりは別名“^{そこ}底”とも呼ばれ、この起き上がりをつける作業を“底つけ”という。底は型に粘土を入れて形を整え、天日に干して自然乾燥させる。底作りは、和紙を型からはがし終わるところから始める。
- ⑦だるまに宝船、大黒、恵比寿といった飾りをつける。宝船はボール紙で作る。大黒、恵比寿はどちらも和紙で作った張子である。専用の型がそれぞれあり、本体のはりかたの時に作っておく。
- ⑧だるま全体に胡粉を塗る。胡粉とは貝殻をつぶして粉にしたものにニカラを加えたものであるが、現在はベースのものも使っている。胡粉を塗ることで和紙が強化され、また表面のでこぼこを修正し、その後の絵付けの下地となる。均一になるよう刷毛で塗っていく。塗り終わったら再び天日に干して乾かす。
- ⑨顔と胴体前部を除き、側面から背中にかけて赤く塗る。これを“赤塗り”という。一般的のだるまの赤をイメージすればよい。やはり刷毛で均一に塗り、天日に干す。
- ⑩乾いたら、いよいよ仕上げに入る。仕上げとして、だるまの顔や胴体前部、宝船、大黒、恵比寿に青、黄、白などの塗料で描彩を施す。これを“絵付け”、“描きかた”、また“顔引き”という。ここから松川だるまとして知られる鮮やかな色彩を作っていく。だるまの顔面の肌色塗りから始まり、



松川だるま完成図 (筆者作成)

約20工程続くがここでは省略する。

4. 松川だるまの材料と道具

和紙	だるま製作に使用する和紙をだるま紙という。ダンボールや古い和紙を溶かし、楮 <small>こうぞ</small> を入れ、手で漉いた新聞紙大の紙を、乾燥しない状態で購入する。
ガラス目	現在は使っていないが、戦前までは盛んに使われていた。
粘土	起き上がりや目玉に使用する。形を整え、外に干して自然乾燥させる。
塗料	最近ではネオカラーを使用している。以前は染料、顔料とも全色ニカワで溶いて使用した。
胡粉	牡蠣などの貝殻を細かく砕いて粉末状にしたもの。
ニカワ	宝船や大黒、恵比寿などの張子をつけるために使用する。
角又	はりかたで和紙を木型の形に合わせたり、底をはりつけたりするのに使用する。
本毛	宝船のだるまの眉毛に使用している。
ニス	黒目、眉毛（いずれも描いたもの）、髭、宝船のへり、帆などに塗って光沢を出す。
金粉	顔をふちどった青色の部分や、宝船の帆にまぶして豪華さを演出する。
木型	松の木でできている。1つのシーズンで木型を何度も使い、和紙をはってはがし、はってはがしを繰り返す。最後に使い終わったあとは、木型をむきだしのまま保存するのではなく、もう一度和紙をはって保存する。
飾りの型	粘土を焼いた素焼き物である。これに和紙をはり、乾燥させて大黒、恵比寿の張子を作る。
小刀	和紙を木型からはずす際に使用する。
竹べら	細長い竹で、木型から和紙をはずす際に使用する。小刀で切り口を入れたところから左右に差し込む。
刷毛	胡粉塗り、赤塗りをする際に使用する。
面相筆	絵付けの際に使用する。いたちの毛で、東京産。

5. 本郷だるま屋の職人の変遷

現在だるま作りを行っている本郷家は、仙台藩士の家系である。本郷家は、江戸時代末期に二代目久三郎の代からだるま製作を始めた。この人物が松川だるまの始祖松川豊之進の弟子となり、だるま作りに必要な技術と、だるま作りに必要な木型などの道具を譲り受けたと本郷家には伝わっている。伊達藩士であった二代目久三郎は、他の武士同様明治に入って士族解体の憂き目に合い、禄を失い生計を立てるために瓦職人となった。瓦業は冬期に入ると休業するため、その間にだるま作りを副業と

した。その子久次郎も瓦屋根葺きを本業とした（関:1966）。

その次の代の徳治も、弟軍哉とともに瓦職人として各地を回った。けさのによると、「昔は、だるまなどこういう縁起物っていうのはほとんど夏売れなかったんですよ。だから、ほとんどおじいちゃんや屋根屋さんやってたんだって」という。そのかたわら副業として二人とも冬の需要期にはだるまを製造していた。腕も確かで有名な寺社の瓦屋根葺きを任されていたが、晩年に至って危険だということから屋根葺きは引退し、だるま作りを本業とするようになった。また同じころ露店商も始めた。徳治は職人肌の人間で口より先に小さなだるまが飛んでくるような人であったが、手先はとても器用で、夏場のお祭で露店を出した際自分で作った舟の形の提灯を売るなど独創性にあふれた人でもあった。

一方徳治の息子徳久も、徳治に従ってだるま作りや露天商を営んでいたが、若くして病に倒れ、その名が世間にとどろくことはほとんどなかった。彼は八代目の徳治とほぼ時を同じくして亡くなってしまったので、九代目として本郷家の家督をついでいるのは徳久の妻のけさのである。

けさのは戦後すぐの昭和 22 年に本郷家へ嫁いできて、来るなりすぐにだるま作りを手伝った。当時は夫の徳久、その父の徳治、その妻のあきと 4 人で作業をした。夏場は露店に行き、だるまを作るのは時間の限られた冬場だったため、特に 12 月から 3 月までのかき入れ時は寝る間もないほどの忙しさであった。けさのはしばらくして次々と子供を出産する。長男（昭和 23 年生まれ）、次男（昭和 24 年生まれ）、三男（昭和 26 年生まれ）の 3 人である。けさのは 3 人の子を抱え、なおかつだるま作りもこなさなければならず、その生活はかなりハードなものであった。しかし、「22 年に来た時こっちの人、米のごはん食べてたんですよ。農家だったって食べらんねんだから。なんだかあんまり裕福なんだよね」という暮らしぶりであった。

やがて子供たちも大きくなり、だるま作りにも慣れてきたころ夫の徳久が病気になってしまった。昭和 40 年頃の話である。入退院を繰り返すような生活になり、だるまを常に製作するのは徳治、あき、けさのの 3 人になった。しかし忙しい時期には子供たちが手伝うこともあった。

昭和 43 年頃には、次男が結婚し、その妻もだるま製造に常に携わるようになった。その頃には徳久の病気も進行し、だるま作りをすることはできない状態であった。そのため次男の妻が代わりを務め、徳治から直々にだるま作りの手ほどきを受けた。

昭和 45 年の冬、転機が訪れた。それまでかくしゃくと筆を取っていた徳治が、急に床に伏し、そのまま帰らぬ人となった。さらにその後を追うように、年が明けてすぐ徳久も亡くなってしまった。まさしくだるまが一年を通してもっとも売れる時期だっただけに、その混乱は相当なものであった。しかし長男の友達や、堤町で同じく松川だるまを製造している家から応援を呼ぶなどしてこの危機をようやく乗り切った。

昭和 47 年にはあきまでもが亡くなってしまった。この時すでに息子たちはそれぞれ仕事に就いていたし、だるま屋の廃業を考えたという。しかし息子たちの説得により続けることになった。息子たちも仕事の合間を見て手伝うようにしたのである。曰く、「母ちゃん、おらたちなんとか協力してだるまさん継いだほうがよかんべや。何代と続いてきたのに今さらやめらんねえべや」。

そして徳治の死後 6、7 年がたったころ、長男が結婚した。今までの例にもれず、この妻もだるま作りに携わることとなった。新たなだるま職人の誕生である。本郷家に来るなり筆を渡され、文字を書かされたという。これで職人は、けさの、長男夫婦、次男夫婦の 5 人となった。本郷だるま屋に居を構えたのはけさのとその長男夫婦である。次男夫婦は別に住み、休みの日やパート後などの仕事の合間を縫って本郷だるま屋を訪れだるま作りを手伝うようになった。

昭和 60 年に松川だるまと他の張子玩具は“仙台張子”として宮城県の伝統的工芸品に指定され、62 年にはけさのが伝統的工芸品産業功労者として表彰を受けた。指定の際、話はまず本郷家に来たが、堤にある同業者 2 軒もともに誘い、3 軒で指定を受けたのだという。

6. 本郷だるま屋の年間スケジュール

ここでは本郷だるま屋でのだるま作り等に関して、1 年間にどういった作業をするのかを記述する。しかし昔のやり方と現在のやり方ではだるま製作に取り組む時期などが異なるので、昔と今の二つに分けて記述する。本郷家にとってターニングポイントと思われる、徳治・徳久が相次いで亡くなった昭和 45 年冬以前のやり方、すなわち両名が元気に働いていた時期と、それ以降に分けて述べたい。

(1) 昭和 45 年以前

昔は、夏場は露店、冬場はだるま作りと、仕事の時期が明確に分かれていた。だるま作りは 9 月の終わりころから 10 月にかけて始まった。木型に和紙をはりつける、はりかたからである。天日で干さなければならないのは上で述べた通りだが、冬場も近づいてくるためそうそうよい天気ばかりが続くわけではない。また日照時間も短くなってくるので乾かすのは大変である。常に天気を気にしつつ、少しでも雨が降ったり、あるいは降りそうな時にはすぐさま室内に運ばなければならなかった。そのような有り様だったため、室内で乾かす必要があった。そこで、“モロ”と呼ばれる装置を使っていた。四角い箱の中で炭を炊き、網をしいてその上にだるまを乗せて乾かしていたのである。その間だるまの底を焦がさないように常に気をつけていなければならなかった。

はりかたが終わるころ、起き上がりの部分を作る作業にかかる。その後 11 月から 12 月にかけて徐々に絵付けの作業に入っていく。まずは年明けの大崎八幡宮のどんと祭で売的分が急ピッチで作られる。年末年始も慌しく過ぎていき、1 月 14 日のどんと祭で露店を出して直接だるまを販売した。

どんと祭が終わると次は旧正月に向けてだるま作りを再開する。各地方にはまだ旧正月での歳の市の風習があったので、そこで露店を出してだるまを売っていた。石巻や塩釜などにも出かけた。正月用品を売ったり、魚を売ったりする様々な市がたつこの歳の市は、仲見世ともいった。

それが終わると、今度は旧正月の七日に仙台市宮城野区の木下薬師堂で行われる七日堂の祭典に向けて準備をしなければならなかった。このお祭には昔から 2 寸 5 分くらいの小さなだるまが業者によって売られていたが、本郷家でも作って露店を出し、販売していた。この小さなだるまは豆だるまと

呼ばれ、松川だるまと違って描彩等は粗雑なものであった。

そうこうしているうちに2月の初午となる。その時岩沼市の竹駒神社で1週間の祭典があり、本郷家はそこで松川だるまを売るため1週間泊り込みで露店を開いていた。

最後に旧3月の節句には前述の薬師堂で祭礼があり、本郷家はそこでぼんぼこ槍と呼ばれる張子玩具を販売していた。各地方での旧正月が終わり、だるま作りが一段落しても休む間もなくこのぼんぼこ槍を作らなければならない。ぼんぼこ槍は張子や乾かした本物のひょうたんの底に竹の棒を挿し、五色に染めた紙の吹流しをつけたもので、火伏せのまじないがあった。

このように、12月から3月まではほとんど休む間もなくだるまや張子作りに励まなければならなかった。けさのは当時をこう述懐している。

冬は夜中2時3時まで作業すんだもの。それに夜中に子供は騒ぐでしょう。いつ寝ていつ起きんだか分かんねえ。

私もあんまり手の早い方じゃねえから、のろまの方だから、「何をいつまで遊んでるんだ！何やってるんだ！」って怒られ怒られねえ。冬になるともうほんと。黙って小っちゃいだるまバンッ！て投げつけられて。私こっち来るときは、だるま屋さんだっっていうことは聞いてたけど、こんなに、なんていうか忙しいっていうか、こんなにだるまってひどいもんだとは思わなかったからね全然（笑）。

張子作りが終わると今度は露店商が始まる。3月～9月に仙台近郊で行われる縁日や、夏祭り、七夕祭り、運動会などに店を出していた。この露店はそれまでのだるまを売っていた露店と異なり、おもちゃや綿菓子、上げ風船などを売った。上げ風船とは、硫酸に亜鉛を加えて水素を発生させ、チューブを通して風船に送り込み浮くようにした風船である。けさのはおもちゃの露店を任されるが多かった。そのおもちゃは東京や山形から仕入れていた。また徳治は手製のおもちゃを売ることもあった。露店についてけさのは、

運動会だ学芸会だなんていう時だってやっぱ私らほら露店で、そういう時は売れるとこさ
は行かなくちゃなんなかったから、子供たちの運動会だのなんだのほとんど見たことない
です私は。息子に、「おかあさんはね、入学式と卒業式だけ来ればいいんだから」って言わ
つて笑われたんだったけどもね。

と語ってくれた。

(2) 昭和45年以降現在まで

夏場の露店は昭和45年以降しばらくしてやめた。そしてだるまを冬期限定ではなく、年間を通し

て作るようになった。しかし絵付けなどの重要な作業は年末に集中的に行われ、やはり冬場は忙しい。まず3月の半ばあたりから、天気を見計らいつつ大きいサイズのだるまのはりかたを始める。天気が崩れ易い梅雨前にはだいたい終わらせておく。次に夏場であるが、この時期にはだるまの起き上がりを粘土で作って、乾かして底付けをする。そして10月から徐々に赤塗りを始め、年末には絵付けを行う。やがて年もおし詰まり、最大サイズである3尺のだるまに絵付けをして最後の仕事とする。3尺のだるまは仕上げるのが大変で、夜通しかかることもある。最近では年に1つしか出ないが、昔は年に2~3つ売れたものだった。また2尺以上の大きいサイズのだるまは、毎年の得意先用に注文があろうがなかろうがとりあえず作っておく。

ちなみに、それぞれの時期に一つの作業しかしないというわけではなく、注文が入ればいつでも仕上げる。また、3~6号の小さいだるまは合間を見て随時作っていく。最近では松川だるまに郷土玩具としての価値を見出す人が増えてきているようで、以前は正月にしか出なかつただるまも年間を通して売れるようになっている。そのため、だるまを作る作業場にあつらえてある棚に、たくさんのだるまが在庫として置いてある。昔はそのような在庫などほとんど置いていなかった。

また、作つただるまは露店で売り歩くのではなく、現在は露店業者に“中卸し”という形をとっている。中卸しにしたのは訳があって、露店を出すには権利などでお金がかかり、準備や当日の労働などで割りに合わなくなったからである。例えば大崎八幡宮でのどんと祭には10年くらい前まで直接露店を出していたが、それ以降は出していない。岩沼竹駒神社の初午でも20年くらい前までは露店を出していた。石巻や塩釜などの仲見世にも30年くらい前までは露店を出していた。薬師堂への豆だるまとぼんぼこ槍の露店は、昭和45年前後にやめた。現在、中卸しとして10軒以上取引している。例えば、大和町、小牛田、石巻などでの歳市の市である。

また昭和60年に松川だるまが県の伝統的工芸品の指定を受けてから、5月と9月に一般人によるだるまの絵付け体験を受け入れるようになった。伝統工芸の指定後教科書などに載るようになり、それを見た先生が張子とはどのようなものか「見せて、作らせて」と来るようになったのである。最初に来たのが本郷だるま屋近くの通町小学校で、この時は学校に直接行って実演した。その後附属、片平、長町小学校など仙台の学生が来るようになり、やがて福島、山形、青森の学生まで来るようになったのである。今は修学旅行のついでなどで来る場合が主で、そういう生徒たちは他に仙台御筆、かご、仙台駄菓子屋も回るケースが多い。遠い所だと北海道や沖縄からも来ることもある。絵付け体験を受け入れる時は仕事ができない。県からもお金など出ないし、体験期間の5月と9月は1ヶ月も仕事を休むことになり、文句も言いたいところであるという。絵付け体験をしに来るのは何も学生たちばかりではない。七北田の老人グループや、趣味で描きたい奥さん連中も訪れるという。

さらに、年間を通して不定期に郷土史家や他の地域の張子玩具製作者が本郷だるま屋を訪ねてくることもある。私がフィールドワークに行った時、幸運にもそういう機会に居合わせることができた。その時はどちらの職人も20代と若い、三春張子の職人と琉球張子の職人が連れ立って訪ねて来て、虎や黒馬などの張子玩具について説明を聞いていった。また、それぞれの産地での作り方や材料など

も紹介していった。

7. 顧客

大別して、信仰の品として昔ながらに神棚に祀る客と、郷土玩具として買う客の二種類に分けられる。

前者のために、大崎八幡宮や塩釜神社に卸している。配達はこの2ヶ所にのみ行っている。大崎八幡宮には大小(3号~15号)のだるまを合わせて約1000個卸す。一方塩釜神社に卸す分は昔より数が減ってしまった。また大和町、小牛田、石巻などの露店業者に中卸しをしているのも、正月にだるまを買い、一年間無病息災を祈願する人に売るためである。

また後者の客のために、仙台市内の民芸品店にだるまを卸している。これらの店は従業員が本郷だるま屋まで車で注文の品を取りにくる。東京のデパートに入っているような民芸品店にも以前は卸していたこともあったが、最近ではやめている。また昔は市内のデパートにも卸していたが、手続きが面倒なのと配達もないのでやめた。取りに来てくれるなら考えてもいいと思っている。仙台市役所にも1度納めたが、やはり手続きが面倒である。その時は、中国人が交流に来た際のおみやげとして渡すということであった。

また、もちろん目的は観賞であれ信仰であれ、本郷だるま屋の店頭で直接買いにくる客もいる。いくつか最近の実例を挙げると、愛知から北海道まで旅をする途中、わざわざ途中下車して店に来て、買っていく学生がいた。東北各県を回っているという女子大生も来た。ある年の12月31日に秋田から母と娘の2人連れが来たこともある。だるまを買いにくることが使命であったという。さらにあげると、大阪近辺から雪の降る日にわざわざ新幹線で買いに来た人もいた。全国ネットのテレビで松川だるまが紹介されているのを見て、いてもたってもいられなくなったという。事前に電話で問い合わせがあり、仙台は雪が降っているからと止めたのに来たのだ。

常連では、岩手から毎年買いに来る客がいる。以前は老夫婦が買いに来ていたが最近ではその息子たちが買いに来ている。聞くと老夫婦は家で待ちかねているらしい。車で来て、子供たちにもだるまを買っていく。そうやって世代を継いで買いに来る人もいるのだ。また秋保のある温泉宿には、そのロビーに大きいだるまがいくつも並んでいる。七転び八起きになぞらえる昔ながらの祀りかたで、小さいだるまから始めて徐々に大きなだるまを揃えて行くことで繁栄を願う。さらに仙台市内のある酒造会社は、最大サイズの3尺だるまを毎年買っていく。1体“たったの”15万円。そして毎年青葉神社のどんと祭で燃やす。昔は従業員がリヤカーで買いにきていたが今は車で運ぶ。

最近では減ってきているものの、店に来る客で一番多いのは仙台の人で、信仰目的だという。客足は11月~12月にピークを迎える。買いに来る前に身を清める人もいる。常連客はやはり信仰目的に買う人に多い。だるま本来の性質上それは当然のことである。毎年正月にだるまを神棚に祀り、1年間の無病息災や家内安全、商売繁盛などを祈る。そして翌年のどんと祭で役目を終えただるまを燃や

し、また新たにだるまを買うのである。そのため信仰深い人は毎年だるまを買い換えている。以下述懐。

昔は店にとりに来る方いっぱいあったからねえ。今でもお客さん、買いに来る人は来ますよ。主に大倉だの、根白石の方なんかもちろん売れてくけども、あんまり出なくなったなあ。根白石の人たちらいなくなったからねえ。刈田の白石だの、あと石巻だのから来る方も多かったんですよ、おっきなの。名入れてねえ、おっきなだるまさん。持ち帰るときは、大きな一反風呂敷持ってきて背中しょって。あのあたり車なんて持ってる人少ねえからねえ。だから紙は固くしなきゃだめなのよ。背中潰れっちゃ危ねえから。あと、そこの、今の荒巻っていいですか、あのへんの人たちらみな多かったです。おっきなだるまさんばりあげたんだよ。今はみな土地売ってわ、百姓してる人なんかもういないべけども。

農家の人たちの方が大きいだるま買いますよ。家も大きいし、棚も立派な棚だからね。板の厚いのた一つと立派にねえ。神棚も奥行きあって立派な神棚でねえ。神棚うしろにして両わきさだるま置くとかねえ、た一つと1枚板ね。中間に神棚だ一つと飾って。

信仰のために買う人は、理屈抜きで買っていく。一方郷土玩具として買いに来る人は、言い伝えなどだるまの造形に対して質問したりこだわる人が増えてきている。例えば、

今はきれいな1つ1つ手にとって、見て買ってくんだから。目から口から。斜めになったのだめだとかね、やっぱり。だからきれいなだるまさんだよ、ほんと今の。昔のは少しくらい色が流れたって、例えば目や鼻だってなんだって、黒いの流れたってどつつうことなかったんだけど。今そういうわけには行かないからね。今はほんとに1つ1つ吟味して描かなきゃねえ。

その他に、特殊な顧客として議員立候補者がいる。昔は地方選で盛んに使われた（河北新報:1989、1992）。しかし平成の最初くらいまでにはだいぶ減ってしまい、最近5、6年は全然出ていない。

また店に来る客は大抵いろいろと話していくので時間をとられる。そういった人がいつ来るか分からないから、本郷家では昼ごはんを食べるのが早い。食べられるうちに食べてしまうのだ。また、誰もその場になくとも作業場には夜9時くらいまで電気をつけておく。突然の来訪者に対応するためである。

最後にだるまの生産数を記すと、だいたい5千~6千個と見られているが、最近では小さいサイズのだるまが数多く売れるためそういったものを全て含めると1万個に達するとの見方もある。

8. おわりに

松川だるまは縁起だるまとして正月に神棚に祀られ、人々にとって長らく信仰の品であった。ところが最近では、その鮮やかな色彩や、和紙などを使い昔ながらの製法によって作られているという事実、また一つひとつ手作りによって生産されているということから伝統的工芸品や郷土玩具として捉えられることが多くなってきている。時とともに松川だるまの持つ意味が信仰の品から観賞用の伝統的工芸品へと変化してきたのである。ではその変化が起きたのはいつごろであろうか。

けさのが嫁いできた戦後すぐのころだるまは冬場しか作らず、だるまの在庫を一年中置いておくこともなかった。当時だるまは信仰用として正月にしか売れなかったためだ。

ところが高度経済成長にともない信仰品としてのだるまが売れなくなっていった。農村の変化と核家族化が原因である。神棚が立派で毎年だるまを祀る家庭の多かった農村の衰退と、神棚のない団地やアパートに住む核家族の増加で松川だるまを毎年買い替える人が減ったのだ。

一方戦後の工業化路線により、世間には大量生産による画一的な物たちが満ち満ちていた。しかし、やがて人々はそれら工業製品に飽き情緒の欠落を感じる一方で、手作りの、昔ながらの民芸品や郷土玩具に強く惹きつけられた。この流れに乗り、一つひとつ手作りで昔ながらの製法の松川だるまは伝統的工芸品として見られることになった。行政もそれに対応し、松川だるまは昭和 60 年に県の伝統的工芸品に指定された。また本郷だるま屋は市内デパートで開催された「仙台市伝統・新作工芸展」に昭和 61 年から数回参加した。そしてこの前後から松川だるまの売れるサイズが小型化したり、きれいな形や汚れのないだるまを見極めて買っていく客が増えた。彼らはおみやげとして買っていくなど観賞用の物としてだるまを捉える。そのため正月に限らず年間を通していつ買いにくるか分からない。よって本郷家では年間を通してだるまを製造するし在庫も切らさないようになった。

このようにして、松川だるまは信仰品から伝統的工芸品として認識されることが多くなってきた。そしてその流れは今もなお続いているのである。

引用文献

藤原相之助

1981 『奥州戊辰戦争と仙台藩』 東京:柏書房。

関善内

1966 『仙台達磨』 仙台:非売品。

鈴木省三編

1972[1926] 『仙台叢書』 仙台:宝文堂出版。